1

軽いノックの後、会議室のドアが開いた。武上悦郎は立ち上がった。パイプ椅子が床をこすって軋んだ音をたてた。

「お久しぶりでございます」

武上が声をかけるよりも先に、石津ちか子はそう言って、ドアのそばで丁寧に頭をさげた。しかし、顔をあげたときにはもう笑っていた。堅苦しい雰囲気は、まったくなかった。

「十五年ぶりになりますか」

長い机を回って彼女の方に近づきながら、武上も笑顔で応じた。武上につられるように椅子から立ち上がった徳永は、その場で興味深そうに様子を見ている。

徳永とは対照的に、ちか子と一緒に会議室に入ってきた若い婦警は、きりっと姿勢を正して一歩後ろに下がった。緊張している。

「昨夜、古い日記をひっくり返してみたら、ご一緒したのは十五年と八ヶ月前のことでした」

ちか子はふっくらとした頬を緩めて、武上に右手を差し出した。二人は握手した。

「本当に昔のことになるんですね。でも武上さんはご活躍で何よりです。ご家族の皆様もお変わりありませんか？」

「おかげさまで元気にしています。家内があなたにくれぐれもよろしくと」

ちか子は嬉しそうだった。「奥様に教えていただいたジャガイモ入りのオムレツは、今でも我が家の人気料理ですよ」

生真面目な婦警の顔にも、ちらりと笑みが浮かんだ。ちか子は彼女を武上に紹介した。

「杉並署警邏課の淵上美紀恵巡査です」

淵上巡査は踵を鳴らして敬礼した。

「淵上です。よろしくご指導をお願い申しあげます」

長身である。一七〇センチ近くあるだろう。引き締まった身体つきは運動選手のようだ。

「事件の後、所田家周辺のパトロールを強化した際に手伝ってもらいました。わたしと一緒に泊まり込んだこともあって、一美さんとはよく話もしています。一時は登下校の送り迎えもしたんでしたね？」

ちか子の問いに、淵上巡査はきびきびと答えた。「はい。数日のことですが」

「よろしく頼みます」武上はうなずいた。

「今日は知った顔のあった方が、一美さんにとってもいいだろうから」
「はい！」
機敏に返答をしつつも、武上の丁寧な口調が意外だったのだろう、思わずという感じで淵上巡査ははにかんだ。武上には彼女と同年代ぐらいの娘がいるが、これがおよそはにかむなどということとは無縁の娘なので、巡査の初々しさが心地よく感じられた。
「下島（しもじま）課長は？」
徳永も交えて、一同は会議室の椅子に落ち着いた。武上の問いに、ちか子が答えた。
「今、署長室です。葛西管理官からお電話だそうで」ちか子はちょっと首をすくめた。
「念押しですか」
「そうですね。でも、葛西管理官は最初から寛大な感じでしたから、心配する必要はないんですよ。むしろ立川（たちかわ）署長が神経質になっておられるようで」
「無理もないですって」徳永が口を開いて、いかにも面白そうにくっくと笑った。「こんなの前代未聞ですからね」
「そういうあなたは、けっこう乗り気だったじゃありませんか」
ちか子は気を悪くした様子もなく切り返した。徳永との付き合いはこの数日のものだろうが、すっかりうち解けた様子だ。十五年と八ヶ月のあいだに、おそろしくいろいろなこ

とがあったであろうにもかかわらず、ちか子の人柄は、若いころとほとんど変わっていないのだと、武上は思った。そういえば、本庁の放火捜査班にいたころの彼女の通称は、〝おっかさん〟だったそうではないか。
「まあ、面白そうですから」まだ笑いながらそう言って、徳永は首をすくめた。「という言い方は不謹慎だな。失礼しました」
ちか子が微笑した。「ところで、外で待機の方とは――」
武上は素早く応じた。「連絡しました。もう配置についてますよ」
「武上さんの班の方だそうですね」
「鳥居といいます。真面目な男ですから、信用してもらって大丈夫です」
会議室の内線電話が鳴った。淵上巡査がさっと立ち上がり、受話器をとって応答した。すぐにこちらを見て、
「下島課長が、署長室に来ていただきたいとのことです」
「じゃ、行きますか」両手でぽんと膝を叩いて、武上は腰をあげた。「興行主へのご挨拶ですな」
これもまた不謹慎な発言だったが、武上はわざと言ったのだった。それは皆にも通じていた。気楽そうにふるまっていても、実は誰もが身構えていることは、よくわかっていた。

2

今から二十二日前、四月二十七日夜のことである。

杉並区新倉町三丁目の住宅地の一角で、複数の人間が喧嘩をしているらしい、女性の悲鳴のような声も聞こえたという通報が、同区山埜町二丁目にある新山交番に寄せられた。これは一一〇番通報ではなく、直に新山交番の電話番号にかけられたものだった。

通報者は山埜町一丁目に住む深田富子、五十二歳。その通話で自らの住所と氏名を名乗っている。富子は山埜町会婦人部の代表であり、日頃から防犯活動などを通して地元の交番勤務の巡査たちとは交流があった。このとき電話に応対した佐橋一成巡査長（五十五歳）も彼女と面識があり、その人物にも信頼を置いていたので、通報を受けると即座に自転車で臨場した。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。